

1 研究主題

家族の一員として生活をよりよくしようと工夫し、実践しようとする子供の育成

2 研究主題について

(1) 研究総論との関連

昨年度より、本校では研究主題を「ともに学び、学び抜く子供」と掲げ、その育成ために - 非認知能力に注目した授業を通して - という研究副題を設定し、研究を進めてきた。今年度も非認知能力の中でも、「意欲」と「粘り強さ」に注目した授業づくりについて、継続して研究していく。

近年では、コロナ禍の制限された生活環境により、大人も子供も生活を見つめ直し、家族と共に行えることを考える機会が増えた。また SDGs が世界的課題として取り組まれる中、「家庭では地球のために何ができるのか？」と日常生活レベルで考えることを求められる社会になっている。このような社会において「小学校学習指導要領解説 家庭編」の中で、家庭科で育みたい学びに向かう力、人間性等として示されている「家族や地域の人々と協働し、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする実践的態度を養う」ことは改めて必要であり、重要であることが焦点化されているように感じる。またこれは研究総論の中にある、これからの時代を生きる子供たちが新たな課題に直面した時にも「他者と協働しながら課題と向き合い、自ら前に進み、豊かに生きようとする子供の姿」を願うという部分にもつながると考える。家庭科における「学びに向かう力、人間性等」に着目した授業づくりが、研究総論に示されている主題の達成につながると捉えた。

以上のことを踏まえ、家庭科では研究主題を「家族の一員として生活をよりよくしようと工夫し、実践しようとする子供の育成」を設定し、(2) で示す家庭科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の育成を目指していく。

(2) 家庭科で考える「ともに学び、学び抜く子供」の姿について

本校の研究総論の主題において示されている「ともに学び、学び抜く子供」の姿を本校の家庭科においては

「友達や家族、周囲の人々との対話を通して自分の考えを広げ、自分の生活課題を改善するために繰り返し課題と向き合い、生活の中で実践しようとする子供」とする。

家庭科では、まず「ともに学び」とは、友達や家族、周囲の人々との対話を通して自分の考えを広げる姿であると考えられる。具体的には児童同士で協働したり、意見を共有して互いの考えを深めたり、家族や身近な人々との対話を通して考えを明確にしたりするなど、自分の考えを広げ深める姿である。

次に「学び抜く」とは、自分の生活課題を改善するために繰り返し課題と向き合い、生活の中で実践しようとする姿だと考える。具体的には題材を通して自分の生活との関わりを意識し、自分で発見した生活課題の解決に向けて様々な解決方法を考えたり、そのために必要な基礎的・基本的な知識及び技能の習得に粘り強く取り組んだり、実践の結果を評価・改善し、さらに家庭や地域で実践したりするなど、何度も自分の生活課題と向き合おうとする姿である。また、このよ

うな一連の学習過程の中で得た知識や技能について『生活の営みに係る見方・考え方』を働かせながら、様々な場面で活用される概念にまで深化させていく姿でもある。

(3) 昨年度の研究からみた家庭科研究の課題

昨年度の研究から今年度の研究につながる課題を整理する。

- | |
|--|
| <p>①「ともに学ぶ」とは、友だちだけでなく家族とともに学ぶことも大事なことであるが、題材全体で家族や実生活を意識した場面が少なかった。</p> <p>②学んだことがその場限りで終わってしまった児童もいるため、生活の中で継続して実践しようとする意欲を育む手立てが弱かった。</p> |
|--|

家庭科で重要視している家族や家庭との関わりや実践意欲への働きかけがあまり深められていないという点が課題であると言える。家庭での実践意欲を高めるには、様々な題材での体験的な活動を通して、感動や達成感などの思いを持てるようにすることや、家族に喜んでもらう経験をすることが大切だと考える。よって2年次では子供たちが生活の中で学んだことを実践したくなるような意欲への働きかけに注目して研究を進めていく。

3 研究内容 「ともに学び、学び抜く子供」を育成するための授業について

(1) 家庭科における「意欲」「粘り強さ」について

家庭科において「意欲」のある子供の姿とは、「自分の生活課題を解決するための様々な方法を主体的に見つけようとし、学習の中で得たことを自分の生活に活かそうとする姿」である。授業の中では題材に沿った自分の生活課題を発見し、それを解決するためにはどうしたらよいのか自ら問い、自ら情報収集をしたり、友達との対話の中からその方法を見つけようとしたりすることが、単元を通して意欲をもって学習を進めるために重要になると考える。そのように学習して身に付けたことを働かせて、実践した経験や成し遂げた喜びを積み重ねることで自信をつけ、実生活へ活かそうとする姿が「意欲」のある姿であると考えられる。

次に「粘り強さ」のある子供の姿とは、先に記述した「意欲」の中に含まれるもので、「意欲」の中の一つの要素であると考えられる。具体的には『よりよい生活』の実現のためにはどうしたらよいのか考え、工夫し、実行するためにくり返し課題に向き合おうとする姿」である。自分や家族にとっての「よりよい生活」は一人ひとり異なるものである。自分なりの「よりよさ」や自分の家族にとっての「よりよさ」の実現に向けて、課題解決のための計画にそって学習を進め、実践を通して知識をより確かなものにしようとしたり、友達と考えを伝え合うことで自分の考えを深めようとしたり、新たな「よりよさ」を見つけるために、学びを広げようとする姿が「粘り強い」姿であると考えられる。

(2) 「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業

子供たちの学習意欲を育むために教師ができることとして、鹿毛雅治は「教育環境をデザイン」することや「教育的な関わり（関わり合い）」を仕組むが大切だと述べている。また、「粘り強さ」について石井英真は、「考え抜く経験の保障」や「関わり合いを大切にしていくこと」を述べている。さらに本校家庭科のこれまでの研究の成果より「子供が課題に向き合ったことに価値を見出し、学習を大切にする場をつくる」ことも大切であると考えられる。

以上のことから、家庭科では

- | |
|---|
| <p>① 教育環境をデザインし、考え抜く経緯を保障する</p> <p>② 教育的な関わり（関わり合い）を仕組む</p> <p>③ 子供が課題に向き合ったことに価値を見出し、学習を大切にする場をつくる</p> |
|---|

という3つの手立てを講じ、実践を行っていく。

① 教育環境をデザインし・考え抜く経緯を保障する

・課題設定の工夫（日常生活でどう生きるかとのつながり＝価値付け）

子供達が生活している家庭・生活環境は子供たちの成長や、地域・社会の影響を受けながら、変化していくものであり、多様なものである。そのような多様な生活の営みの中で生きている子供たちが中心となって意欲をもって学び続けていくためには、学習課題も自分自身の家庭生活をよりよくできそうだという思いを持てるような、リアリティのあるものを設定しなければならないと考える。「自分事の問い」が生まれることで一人一人の学びの必然性が生まれ、学習に熱中することができるのではないだろうか。そのためには「生活の問い直し」が必要である。「生活を見直す中で、生活に対する多くの疑問が生じ、疑問を追究していくことで生活の成り立ちやそれを構成する要素、多様な生活の見方・考え方を発見することができる。」（堀内、2020）そうして見えてきた問題について題材を通して子供に意識化させていくことが解決に向けた意欲を継続させるために重要であると考え。そして「この学習がどう生活で生きるか」、「この学習が生きればどのようによりよい生活ができるか」という価値についても予想させ、学習への期待感を高めていきたい。

・家庭や地域における実践的な活動を見据えた題材構成の工夫

研究総論の中では考え抜く経緯の保障について「課題に対して、見方・考え方を働かせて試行錯誤しながら向かい合うこと」の重要性が述べられている。家庭科においては題材を通して「見方・考え方」を自然と働かせることができるよう様々な工夫をすることが重要だと言われている。子供たちの中ですでに概念化されている「見方・考え方」を働かせて学習内容について深く考えたり掘り下げたりして、考え抜く経験を保障することが重要ではないだろうか。そのような学習経験を積み重ねることで、様々な場面で目的に応じて使い分けられる知識や技術として活用できる力を育みたい。また家庭科学習指導要領の内容構成ではA(4)「家族・家庭生活についての課題と実践」が新設され、日常生活の中から問題を見出して課題を設定し、習得した知識及び技能などを活用して課題を解決する力と生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を養うことが示されている。

以上のことから、子供達が家庭や地域における実践的な活動ができるようにするため、個人の家庭での実践を見据えた題材構成と振り返りの積み重ねをしていくことが大切だと考える。まず題材構成については、問題解決型の流れを基本として学んでいく中で、さらに知りたいことや解決したいことを明確化していく環境を設定する。その積み重ねを家庭や地域での実践的な活動を考える際に振り返ることで、どの題材や内容について取り組むのが自分の生活をよりよくするためによいのかを選択しやすくできるようにしたい。

学習過程	学習活動	知識	技能	思考・判断・表現力			学びに向かう力
生活の課題発見	既習の知識・技能や生活経験を基に生活を見つめ、生活の中から問題を見出し、解決すべき課題を設定する。	根拠となる知識の習得 生活課題を解決するための えた活用できる知識の習得	能の習得 生活課題を解決するための技 技能の習得 実生活に活用できる	生活の中から問題を見出し、解決すべき課題を設定する力 解決策を構想する力 生活課題について多角的に捉え	考察したことを表現する力 実習や観察・実験の結果等について	他者と意見交流し、実践等について評価・改善する力	○家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度 ○生活を楽しみ、味わい、豊かさを創造しようとする態度 ○日本の生活文化を大切にし、継承・創造しようとする態度
解決方法の検討と計画	生活に関わる知識・技能を習得し、解決方法を検討する。 解決の見通しをもち、計画を立てる。						
課題解決に向けた実践活動	生活に関わる知識・技能を活用して、調理・製作等の実習や、調査、交流活動などを行う。						
実践活動の評価・改善	実践した結果を評価する。						
	結果を発表し、改善策を検討する。						
家庭・地域での実践	改善策を家庭・地域で実践する。						

② 教育的な関わり（関わり合い）を仕組む

・教師がコーディネーター（個人の考えや意見を共有し、見方を広げさせ、問い返す）

子供の発言についてどのような見方・考え方を働かせているのかを教師が問い、子供自身がそのように考えた根拠や働かせた見方・考え方を説明できるようにしていく。教師が解釈を加えるのではなく、子供たち自身で表現する問い返しを行っていく。また、子供と教師だけの問い返しだけではなく、子供同士での問い返しや表現し合う活動も仕組んでいきたい。題材や1時間の授業ごとに具体的な姿で目指したい子供の姿を示し、働かせたい見方・考え方が働くような問い方をしていきたい。

子供たちが育ってきた各家庭の様々な経験を踏まえ、自分の考えや意見を共有することにより、さらに見方が広がると考える。当たり前だと思っていた自分自身の生活を改めて見直す機会を設定し、多様な生活の営みの在り方を知ることで、各家庭で大切にしていることの共通点を見つけるなどの問い返しをすることで学習課題に対しての意欲がより高まるようにする。家庭ごとに様々な状況があるため、子供たちの児童理解をしっかりと行った上で、各家庭や児童のプライバシーを尊重し、配慮していくことも必要である。

③ 子供が課題に向き合ったことに価値を見出し、学習を大切に作る場をつくる

・OPPシートの活用

非認知能力の自己内対話・自己啓発力を伸ばす上で堀哲夫の考案した評価方法 One Page Portfolio Assessment (堀哲夫, 2019) において用いた OPP シートは有効的である。自分の学習の足跡が自分自身で分かる。「できるようになってきた」「分かるようになってきた」という自己肯定感も高められる。

そして、題材を通して、教材としての OPP シートを取り入れることによって、子供が学習することの意味を感じたり、思考力、表現力などの資質・能力が向上していったりする。これまでの研究においてその継続的な取り組みが、子供たちの思考力や表現力を高めていくことや学習内容の理解度を見取ることにも有効であることがわかった。また、子供自身が自分を客観的に見て自己評価し、それを繰り返すことにより、自己調整が出来るようになる。教師側も、子供たちの記述内容やその変容をさらに具体的に分析し、家庭科の資質・能力を見取るようにしていきたい。そのためには、毎時間「授業の一番大切なこと」は何なのかを子ども達自身が明確に記述できるように指導し、適切に見取る必要がある。その題材にとって必要な「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を整理し、適切な見取りから次時の目標を設定し、授業改善を図っていきけるようにする。

子供たちは、物を作ったり、学習したことを生活に生かしたりすることを通して、作る楽しさや自分にもできるようになったという達成感など実践する喜びを味わわせたい。

評価については、パフォーマンス評価を取り入れる。教師側は、家庭科における「見方・考え方を働かせた子供の姿」を設定し、それに対応して子供たちを見取っていく。また、授業中には授業観察や制作・実習過程の子供の様子も評価していく。物を作ることに関しては、製作物も評価の対象となる。子供同士での声かけも教師が促し、価値の認め合いも行い、自信をつけさせながら、「できた！楽しい！やってみよう！」と生活をよりよく工夫し、実践しようとする子供を目指していきたい。

〔引用文献・参考文献〕

- ・文部科学省 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
- ・鈴木明子 (2017) 「平成 29 年度版 小学校新学習指導要領ポイント総整理 家庭」東洋館出版社。
- ・文部科学省 (2018) 「小学校学習指導要領解説 家庭科編」東洋館出版社。
- ・堀哲夫 (2019) 『新訂一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』、東洋館出版
- ・鈴木明子 (2019) 「コンピテンシー・ベースの家庭科カリキュラム」東洋館出版社
- ・堀内かおる (2020) 「生活をデザインする家庭科教育」世界思想社
- ・山梨大学教育学部附属小学校 令和 3 年度研究紀要「学びをつなぐ子供（三年次）」2021
- ・筒井恭子 (2022) 『小学校 資質・能力を育む 家庭科の授業づくりと評価』